ノ未ノ字ノ次ニナケレバナラヌ又用ノ字ガ之者ノ上ニ在レドモ是レハ須ラク醫藥之ノ次ニ在ルベキデアル此序ノ錯誤ハ蓋シ版下書キガ間違ヘタモノデアラウト思フガ其ンナコトニハ委細オ構ヒナク強テ之レニ返リ點并ニ訓點ヲ附ケテ居ルノハ頗ル滑稽デアル

○斷枝片葉（其十四）〔前號其十四ハ其十三ノ誤植〕

牧野富太郎

●あけび違ヒ　今日使用ノ或ル中等植物教科書ニ手提籃（バスケット）ガ普通ノあけびデ造ラルヽトシテ圖マデ入レテ書イテアッタガ此あけびハ當サニみつばあけびトスベキモノデアル世間デハ通常あけびノ「バスケット」ト稱スレドモ是レハ普通ノあけびデ製シタモノデハナイ　**●月見草違ヒ**　某理學博士某理學博士某某（オー疲レタ）ノ著者ニつきみさうトアルノハ皆おほまつよひぐさノ誤リデアル今日世間デハおほまつよひぐさヲつきみさうト呼ンデ居レドモ元々（モト）是レハ不詮索者ニ誤マラレタ名デ本當ハサウデハナイ然レバ本當ノつきみさうトハドンナ者デアルカト云フニ是レハ白キ花ヲ開ク一種デ世間デハ餘リ見ナイガ偶ニハ培養シテ居ルモノガアルソレハ德川末葉時代ニ日本ヘ入ッタモノデ其レガ辛フジテ今日ニ傳ハッテ居ル學名ハ Oenothera tetraptera Willd. デアッテ葉ハ羽裂シ果實ニハ四稜ガアル、此屬中ノ者デ一番早ク日本ヘ來タノハまつよひぐさ Oenothera odorata Jacq. デ其レト同時ニ前ノつきみさうガ來タ是レハ明治維新前ノ事デアルガ更ニ維新後ニナッテ間モナクおほまつよひぐさ Oe. Lamarkiana Seringe. ガ傳ハリ其レカラ幾十年ノ後新タニめまつよひぐさ Oe. biennis L. ガ來タ今日デハ右ノまつよひぐさモおほまつよひぐさモ又めまつよひぐさモ共ニ野生ノ狀態トナッテ其地此地ニ生エ何レモ黃色ノ花ヲ開クガ獨リ白花ヲ開クつきみさうノミガ生氣ガ弱ク他ノ三種ノ樣ニ勢ヨク野生ノ狀態ニモ成リ得ズ唯僅ニ庭園ノ一隅ニ餘喘ヲ保ツニ過ギナイ有樣デアルカラ其內日本ニ跡ヲ絕ツニ至ルカモ知レヌ恐ガア

ル

●古渡リノだんどく九州ニ生キ延ブ　徳川時代ニ渡來シタだんどく（曇華）ガ唯僅ニ九州ノ地方ニ遺ッテ生キ延ビテ居ルガ近年はなだんどく（新稱）間種ノ園藝品デ種々美麗ナ花ヲ開ク者ガ擴ガルニ連レテ此古渡リ品ガ日ヲ逐テ寂滅ニ近ヨリツヽアルノハ甚ダ痛惜スベキコトデハナイカ

●翠雲草ハ明治初年ニ始テ我邦ニ入ッタ　「秘傳花鏡ノ翠雲艸明治ノ初年ニ支那ヨリ舶來ス翠色愛ス可シハリ々々草ニ非ズ亡友榊原芳野一鉢所持シテ示シタリキ　雄作識」ト朱書シタ小紙片ガ東京帝室博物館所藏ノ島仙著『隨地所生草品圖說』一ノ卷ノ翠雲草（同書ニハ和名カバミカサ、カバミザシバリ、ハリ〳〵草トシテアル即チ今謂フちどめぐさデアル）ノ處ニ貼ラレテアル多分其當時今泉雄作君（同館ノ美術部長、美術工藝部長デアッタ人）ノ自ラ記シテ貼付セラレタモノデアラウ今此記ニヨッテ私ハ此翠雲草即チこんてりくらまごけ（本誌第二卷第五號ノ「こんてりくらまごけノ學名ト漢名」參照）ガ明治初年ニ始テ我邦ニ傳ッタ證ヲ得タノヲ喜ンデ居ル

●菊芋ハ何時日本ヘ來タカ　明治九年六月東京デ發行シタ『農業雜誌』第十二號デ津田仙氏ガ菊芋ノ事ヲ書イタ之レニ據レバ此芋ガ我邦ニ入リシ徑路ガ能ク分ルカラ此ニ轉載スル『菊芋は向日葵の一種にして非常に多量の根塊を生ず猶馬鈴薯等の如し此は元來南亞「ブラヂル」國の産なりしに近來漸く諸國に傳播せり之を作る事の容易なるや實に無造作至極と云ふて可なり然れども其養分の多き事は殆んど馬鈴薯に齊しと云ふ之は一體生芋にても食し得可しと雖ども肉と共に煮て食すれは其味頗る佳なり但し尋常の芋等を煮る如く醬油のみにて煮る時は其味佳美ならず豕又は兎等の飼料となすには實に無上の良品なり　此芋の我邦に傳はりたる由來を尋ぬるに今を距る十二三年前前の英國特派全權公使「アールコック」君の我邦に來るや之を該國より携へ來り始めて當府下高輪東禪寺内に培養せしに其收納極めて多く能く我日本の地に適せるを悟り之を親ら調理して態々當時の執權安藤對馬守へ捧げ此芋の大ひに養分多く且つ其收納の許多なるを以て到底我日本人の爲めに有益の植物たる事を具上せしも當時は勸業の道いまだ開けず從て斯くの如き事に注意する有司も寡なかりし故にや親しく其席に列したる人の外は之を知る人とても非ざりし余輩は何の幸か委しく此事を知り得し儘今日に至て此芋の有益なる由を陳述するを得るは又何の幸ぞや』